

余暇施設開発の実際 24.

20 代若者の余暇活動意識調査の出現状況について

余暇施設開発 余暇活動意識 20 代

正会員 ○三上訓顯*1
大野紘資*2
西口真也*3

1. はじめに

これまでの本一連の研究注1では、運営面からみた我が国スキー場を取り巻く諸状況について述べてきた注1。本報では、平成に生まれ社会的に大きな変容であるインターネットという新媒体が普及してきた時代に育ち、この機能を用いて通信販売を行い、また余暇情報を収集してから行動をおこし、その利用方法もネットを通じた形態をとるといった具合に、従来の余暇活動とは大きく異なった活動が伺える。今後の余暇活動の方向性を示唆し牽引をしてゆく可能性が高い 20 代の若者である。彼らの意識をたずねることは有意義と考えた。

本報では 20 代若者を被験者とし、現代の余暇活動への関心度合を探ることを研究目的とした。特に 20 代若者を被験者としたのは、従来の余暇意識とは異なるこの世代固有の志向性や利用が予想され、今後の余暇需要を示唆する要因の一つになり得ると考えた故である。

2. 余暇活動意識調査結果の出現状況

余暇活動意識調査は、2009 年 10 月～11 月に実施、対象は名古屋市立大学、追手門学院大学、阪南大学の 3 年生、過半は 1988 年 4 月から 1989 年 3 月に出生した。調査は無記名アンケート方式とし、設問は、従来の余暇白書で使用した余暇活動 50 項目注2を用い、関心度 4 段階(多いにある、少しある、薄い、全くない)で評価し、被験者の属性も調べた。得られた有効サンプル数は、144 サンプルであった。

144 サンプルの回答を集計し、50 項目及び関心度 4 段階評価別に示したのが表 1 である。各 50 項目中、「関心がある」の評価の出現数の最大値から順に並べ替えており、また各 50 項目中の関心度評価が最大値である項目にハッチングを施した。

全体の出現状況を 50 項目の最大値でみると、関心が「多いにある」16 項目、「少しある」7 項目、「薄い」5 項目、「全くない」22 項目となる。また「多いにある」と「少しある」の関心度が 23 項目、「薄い」「全くない」が 27 項目となり、関心の有無では全体で二分された出現状況となる。各項目内容に左右されることもあるが、ここでは比較的安定性がある項目だと判断できる。全出現数の平均値 14.51、標準偏差 18.49 である。

表 1. 調査結果の出現数

評価	関心度			
	4多いにある	3少しある	2薄い	1全くない
20音楽鑑賞CD	66	43	8	5
17ビデオ鑑賞	55	40	13	6
03国内旅行	42	42	13	7
19パソコン	46	46	16	7
27漫画雑誌	47	47	11	11
01外食	57	57	8	6
05映画鑑賞	54	54	12	7
04海外旅行	37	37	19	19
16テレビ鑑賞	53	53	18	8
13カラオケ	38	38	26	17
30ドライブ	40	40	27	16
18TVゲーム	47	47	23	20
06音楽会・観劇	41	41	26	24
28読書	34	34	29	31
32ボウリング	46	46	25	24
02バーサク	47	47	32	14
07スポーツ観戦	35	35	31	31
44スノーボード	44	44	21	34
10ゲームセンター・遊園地	41	41	40	17
41野球・ソフトボール	38	29	28	29
36バレー・バスケ	37	49	35	28
42サッカー	37	31	35	24
31ピクニック・散歩	33	32	40	19
49マリンスポーツ	31	29	36	24
11動物園他	29	33	38	24
12美術館・催事	29	40	40	35
22写真ビデオ制作	29	23	42	26
21楽演奏	27	35	33	28
39ゴルフ・テニス	27	40	23	24
09パソコン他	26	24	22	22
33ジョギング	26	30	40	42
15トランプ他	25	31	33	35
50水泳	24	27	44	28
43スキー	23	38	37	26
46登山・キャンプ	23	26	40	47
35フィットネス	21	27	40	47
48サイクリング	21	42	42	38
08空くじ	20	26	47	31
24絵画・模型制作	20	21	32	41
40卓球・バドミントン	19	38	39	28
47魚釣り	19	39	36	29
37柔道・剣道	15	24	40	29
14囲碁・将棋	13	17	34	38
34体操	13	21	49	17
45アイススケート	13	31	41	29
25織物・和裁	10	19	37	34
38乗馬	10	21	31	34
26茶道他	9	21	40	30
29園芸	8	19	38	39
23文芸創作	5	13	40	42

3 出現数構成比について

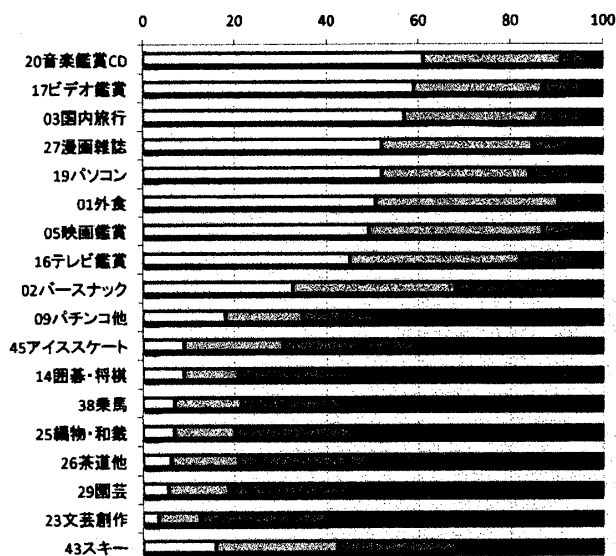
図 1 は、50 項目の関心度評価の構成比の中から「多いにある」、「全くない」の対極にある評価の構成比が、それぞれ 50%を超える 17 項目、さらに本報研究テーマのスキーを最下段に加えたものである。

関心が「多いにある」は 8 項目であり、これを見ると、音楽鑑賞 61.2%、ビデオ鑑賞 59.0%、国内旅

A Practical Site of Development on the Leisure Facilities Part 24.

About the appearance situation of the leisure activity consideration investigation of a young person in one's twenties

MIKAMI Noriaki et al



■4多にある ■3少しある ■2薄い ■1全くない

図1. 関心度構成比(最大値のみ抽出)

行56.9%、漫画雑誌52.08%、パソコン52.1%、外食50.7%で過半を占め、映画鑑賞49.3%、テレビ鑑賞45.1%である。6項目がインドアで、主に個人で行われている趣味創作活動であることが顕著である。

関心が「全くない」では7項目が該当し、最大値の文芸創作59.7%、乗馬56.9%、囲碁・将棋55.6%、園芸54.9%、編物和裁54.2%、茶道他51.4%、パチンコスナックが50.0%、がいずれも過半を占めており、アイススケート41.0%が続く。従来から行われてきた和裁や囲碁、あるいは年齢的にたしまない園芸、そして大人の遊びであるギャンブルには、二十代若者の関心が全く示されていない。

また関心が「多にある」で最大値になった項目であるとともに、「全くない」項目で最小値となったのが8項目、その逆に関心が「多にある」で最小値、「全くない」が最大値に7項目が該当し、二十代若者の好き嫌いが顕著に示された様子がうかがえる。

さらに本一連の研究で扱ってきたスキーでは、「多にある」16.0%、「少しある」26.4%、「薄い」25.7%、「全くない」32.0%となり、各値は比較的各評価段階で分散傾向だが、過半の57.7%が関心が「薄い」或は「全くない」という結果になった。

表2の被験者属性では、余暇活動1回あたりの費用が2,000～6,000円、1回あたりの活動が2～6時間、活動場所は近隣地域以下で遠出をしない、同伴者は友人が最多で個人が続く、といった傾向が顕著である。

これらをまとめると現代の二十代若者は、主に一人

表2. 被験者属性

1回あたりの費用	2000円未満	2000-4000円	4000-6000円	6000-8000円	8000-10000円	10000円以上
出現数	24	37	30	9	12	32
構成比	16.7	25.7	20.8	6.3	8.3	22.2
1回あたりの時間	1-2時間	2-4時間	4-6時間	6-12時間	12-24時間	1日以上
出現数	5	48	44	19	5	22
構成比	3.5	34.0	30.6	13.2	3.5	15.3
活動場所	自宅・自宅	近隣地域	隣接市街地	県内	隣接県域	その他
出現数	38	38	16	18	19	15
構成比	26.4	26.4	11.1	12.5	13.2	10.4
同伴者	自身	家族	友人	恋人	その他	
出現数	36	2	93	11	2	
構成比	25.0	1.4	64.6	7.6	1.4	
性別	男	女				
出現数	99	45				
構成比	68.75	31.25				

表3. 全国値 - 余暇活動の潜在需要

上位10種目	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位
活動項目	海外旅行	国内旅行	スポーツ観戦	スノーボード	登山	料理	将棋	オートキャンプ	動物園・植物園・水族館見学
参加希望率	31.2	15.5	13.6	11.7	9.1	7.1	7.1	7.1	7.1

又は友人とで、パソコンで情報を探りながら、インドアでテレビ、漫画、ビデオ、音楽などの感性媒体を楽しむ、おそらくパソコンによる情報収集の反映とみられる唯一の野外活動である国内旅行を好む。スキーは好きな人もいますがそれはマニアと呼ばれる人達の世界だ、といった点が二十代若者の特徴とみられる。

4. 全国値との比較

表3に、全国の二十代の余暇活動潜在需要上位10位^{注1)}迄を示した。これと図2とを比較すると、国内旅行は一致するが、それ以外の項目では一致せず、むしろ相反する項目が登場するなど相違点が多い。本報では、二十代であっても学生と社会人という立場の違いが余暇意識に反映されたものと判断している。

5. まとめ

調査解析の結果、平成生まれ二十代、特に前半の若者の余暇活動意識について、特徴あると判断できるデータが得られた。このデータを用いて次報以降で、彼らの意識の構造や活動のための要因を分析する。

参考文献

- 注1. 余暇施設開発の実際1～23. 日本建築学会大会梗概集, 1996～2009.
- 注2. 日本生産性本部: レジャー白書2009. 2009年, p16～19の91項目を検討し、類似性が高いものを集約し、50項目に再編した。
- 注3. 日本生産性本部: レジャー白書2009. 2009年, p15.

※1 名古屋市立大学大学院 教授・博士(デザイン学)
 ※2 名古屋市立大学大学院研究員 芸工修
 ※3 名古屋市立大学大学院研究員 経営修

Nagoya City University Graduate School, Proj. Nagoya City University Graduate School, Ph.D.
 Nagoya City University Graduate School.
 Nagoya City University Graduate School.